

プロフィールで、まだ手話をおぼえてたでござらない手話で語っていた男児が、家族との海水浴の思い出の話になった途端、流れるような手話語りに変わり、聞く側にも光景が生生きと浮かんできたエピソード（広津）。義務的に話す話題ではなく、話したいと感じる話題では口話でも手話でもなめらかに表現できるので私は納得。

ピックアップしたい箇所はまだまだたくさんあるが、それは読者にゆずりたい。

ただ、題名に関してだけ一言付け加えることを許していただきたい。「このころで関わりこのころをつかう」はまさにそうなのだけれど、田中氏や一六人の著者が思っている「このころ」は一般に使われている「このころ」よりはるかに重いと私は考える。編者の内海氏があとがきで、「このころの治療援助を専門としている人たちがやっていることなんですよ?」「このころで関わりこのころをつかう」なんてあたりまえじゃないの? なんてわざわざ本の題名にしてまで言い立てるわけ?」という読者を想定している。それに対して、

それは当たり前なのだが、実はそう容易じゃなくなっているからこの本を編んだとこたえている。でもそれはこの本を読んだから納得する人が多いのではないか。まず「読みた」という気持ちを強く刺激したい。私の中に「まるごとの自分をつかう心理臨床」という副題をつけた気持ちが生まれている。

〔文 献〕

神田橋條治「追補 精神科診断面接のコツ」岩崎学術出版社、一九九四年
神田橋條治「書評『フォーカシング事始め』」精神療法、二二巻、九二―九三頁、一九九六年
成田善弘「精神療法家のひとりごと」金剛出版、二〇一九年

伊藤研一

(いとう・けんいち/学習院大学)

●森川すいめい著

『感じるオープンダイアログ』

本書はこれまでに出版された「オープンダイアログ（OD）」の啓蒙書とは明らかに一線を画したものである。書名『感じる』に著者が込めた意は「ODを知識としてではなく、感覚的に捉えられることを目指した」ところにある。

著者自身がODの発祥の地に直接出向き、トレーニングを受け、その体験が率直に生々しく語られているところに本書の最大の特徴がある。ODのトレーニングを受けることは、自らクライアントと同じ立場に身を置くことである。そこで自らの内面にかなる変化が生じ、そのことがその後の臨床家としてのあり方にかなる影響を及ぼしたか、著者はいかに述べている。

そこですべて著者が直面した大きな壁は、自らを率直に語ることの難しさであった。それまで著者は一般の臨床医と同様に「家族と話して専門

的な解釈や助言をする」ことを生業としていた。ODではそれが通用しない。著者は自分のことを話すことの恐怖心を次第に克服する中で「ありのままの自分が他の人に受け入れられることによって、私は自分自身を受け入れられるようになっていった」。著者がODの中で赤裸々に語った内容は、自らの内面に潜在化していたさまざまな心的葛藤である。自分自身のこのころの痛みを語ることで、周りの人に受け止めてもらうことによつて、著者は初めて他者のこのころの痛みを感じる事ができるようになった。いかなる臨床家であっても、人生でつらい心的体験を



講談社現代新書 2021年
860円(税別)

持つものである。しかし、それをこのようになかたちで述べることは誰にでもできるものではない。その意味で評者は著者に深い敬意を表したいと思う。そして後半にODのトレーニングを経験した後の著者の臨床のありようについても具体的に述べている。

以前、評者はODに関する本の書評(本誌二八号、二〇一七)を書いたことがあるが、その中で評者もその足りなさを抱いたのは、紹介者自身がそれまでの自らの臨床活動を振り返りながら消化吸収し、自らの活動の延長に位置づけ、血肉化し、自らの言葉で論じるといふ姿勢があまりみられないことであつた。その点からすれば、本書は評者の期待に添えてくれている。評者が本書で学んだエッセンスは、他者を深く理解するためには深い自己理解が不可欠だということである。本書のタイトル『感じる』にはその意が込められている。

今やマンガによる啓蒙書まで出版され、そのとつつきやすさが強調されがちであるが、はたしてそうなのか。本書はわれわれに今一度立ち止

まって内省することを促しているように思われてならない。

最後に注文したいことがある。ODでは「感情のやりとり」が大きな比重を占めているためでもあるが、そこで参加者がどのような内的体験をし、クライアアントにどのような内的変化が生じるのか、その治療機序がもう一つ不明瞭である。ポリフォニーが大きな力となつていくとされるが、評者にはどうにも解せないのである。治療関係の中で当事者としての治療者やクライアアントのこころ(情動)がどのように動き、予期せぬ(?)変化が生じるのか、治療者自身の意識体験に即して丁寧に論じてほしいものである。これこそ臨床のエヴィデンスだと考えているからである。それを明らかにできなければ、掛け声ばかりが先行し、結局は一時的な流行で終わりがかねないと危惧される。

小林隆児
(こばやし・りゅうじ/感性教育臨床研究所)

精神科臨床を学ぶ 症例集

青木省三【編著】 前・川崎医科大学精神科学教室主任教授
現・慈圭会精神医学研究所所長

精神科臨床とは何か、また、その臨床技術をどのように伝えるかに精力を傾けてきた一人の精神科教授と教室員たちによる症例論文の集大成。



CONTENTS

●思春期・青年期

ひきこもり——一歩足を踏み出すのを援助する
暴力行為が前景に出たトウレット症候群の治療を経験して他

●摂食障害

現代の摂食障害・総論
仲間的に支援した摂食障害の1例 他

●統合失調症・うつ病

総合病院に入院した妄想型分裂病患者へのアプローチ
について——研修医として考えたこと
抗うつ薬の減量により軽快したうつ病の1例 他

●発達障害

精神科臨床と「こだわり」
アルコール使用障害(依存)とこだわり 他

●精神療法

コミュニケーションの糸を紡ぎだす
精神療法とはなにか——薬物療法以前に考えるべきこと 他

●訪問・アウトリーチ

入院が長期化した精神分裂病患者に対するアプローチ
——自宅への外出が転機となった一症例の治療経過を通して 他

■A5判/本体3,600円+税 ISBN978-4-535-98462-2

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4 TEL: 03-3987-8621 / FAX: 03-3987-8590  日本評論社
ご注文は日本評論社サービスセンターへ TEL: 049-274-1780 / FAX: 049-274-1788 <http://www.nippony.co.jp/>